

マーク・R・マリンス著

『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』

(高崎恵訳、トランスビュー、2005年、351頁)

大江 満 (立教学院史資料センター学術調査員)

本書は、一九九八年にUniversity of Hawai'i Pressから『Christianity made in Japan: a study of indigenous movements』と題して上梓された原著の翻訳である。著者のマーク・R・マリンスは、日・米・カナダにおける異文化体験に深く根ざしたまなざしをもつ研究者であり、本書はその日本のキリスト教土着運動(以下、土着運動)の研究成果の結晶である。一九世紀に日本に再入植されたキリスト教(プロテスタント)を契機として派生した日本固有の土着運動は、ミッシェン教会の系譜にある主流派からは異端視されてキリスト教研究者の関心外にあり、社会学や宗教学における日本の新宗教運動にかなする隆盛な研究現状と比べても注目度がすくないため、これまで研究対象としては等閑視されてきた。その意味で、この土着運動を「日本製キリスト教」として評価し、フィールドワークにもとづく解釈学的社会学によって日本でのキリスト教の「流用の過程」の解明を試みた本書は、日本宗教学史における未開拓分野での先駆的業績

といえるものである。

第二章は、明治期から戦後までの日本のキリスト教の歩みを概観し、外国ミッシェン起源の日本人教会については本書の研究対象外としながらも、正鵠を得た論述で簡便にまとめられている。後半では、本書が対象とする創立一九〇一年から一九九七年にいたる二三の土着化運動を挙げ、当事者自身の状況定義を重視した「自己規定」「土着化の程度」「基本的志向」という三つの基準にもとづく、チャーチ・セクト理論を援用した土着化の比較類型論を提示。土着の最低限の必要条件を「自治」「自助自立」「自己拡大」とし、日本のキリスト教団体は「外国志向」か「土着志向」かに偏る傾向があり、土着運動は正統性の自己理解において、排他(独占主義)的な「セクト」(イエス之御霊教会)か、協調(多元主義)的な「教派」(無教会運動、基督心宗教団、道会、原始福音)かに分類されるという、土着運動の基本的特徴を描き出すための枠組みを導入している。

第三章は本書の白眉である。イエスは「治療者兼悪魔祓い師」として知られた指導者であり、キリスト教の出发点は霊の世界に深く根ざした新宗教運動であったが、宗教改革後そうした霊的資質を軽視してきた西洋プロテスタント諸派による伝道への応答として、カリスマ的な指導者と現象が躍動する原始キリスト教への回帰志向が、

過去一世紀以上の非西洋世界での「脱西洋化」土着運動を特徴づけており、とくに日本の文脈ではミッシン教会と訣別した新宗教として位置づけられる。新宗教といえども「無」からの創出ではなく、聖書や移植されたミッシン教会、在来の日本の文化と宗教をその源泉として、「準教祖」による宗教体験と新たな啓示に依拠するもので、聖書や宗教体験から得る神との直接の出会いおよび癒しの奇跡が「準教祖」らに共有する。かれらの教えや著作には、聖書と同様またはそれ以上の権威がみとめられ、「準教祖」が崇拜対象となる場合もある。「準教祖」の教えは、イエスが弟子に約束したさらなる真理とする「充足」や、墮落した西洋教会に重要な真理を取り戻す「復興」と説明される。著者は、二〇世紀三〇年代までの日本の土着運動を、土族とその後継者による儒教のエトスを核とする「エリート」の宗教性、四〇年代以降のそれを、民俗宗教の伝統による「大衆の宗教性」と区分し、独立土着運動の草分け的な前者を第四章（内村鑑三と無教会）と第五章（松村介石と道会、川合信水と基督心宗教団）で、また大衆的な後者を第六章（第二波の土着運動）として代表的なイエス之御霊教会、聖イエス会、原始福音運動）で、それぞれ詳論している。

第七章は圧巻である。日本宗教の「下部構造」をなす祖先や死者の世界と結びついた信仰と慣行に対応できな

かったプロテスタント・ミッシン教会にたいし、この伝統的な関心事に対処しているのは土着運動をふくめた新宗教であることを論証。マスメディアも霊的指導者や霊媒師をとりあげ、経済的繁栄を祈願する企業も会社墓地をもち宗教儀礼をおこなう現代において、死後も家族との絆を保持する日本人に受容されたのは、キリスト教信仰を知らずに他界した祖先の救いに希望のないプロテスタント神学でなく、日本の民俗宗教にとりくみ、霊界への宣教をキリスト者の正当な使命として一九三〇―四〇年代に設立された「第二波の土着運動」指導者の神学的見解であったとする。かれらは、現世と霊界が相互依存する「心靈主義的世界観」を信念として、また新約聖書を根拠にして、死者の霊の救済論を展開、なかでもイエス之御霊教会は祖先や水子の身代わりの洗礼をし、また怨霊の崇りの可能性のある死霊の救済のために、原始福音は沖繩戦没者の記念碑の前で特別礼拝を、聖イエス会は九州のカトリック殉教地で追悼ミサをおこなうように、救済の範囲は霊界にまで拡大され、「世界の再呪術化」の様相が演出される。

第八章では、キリスト教改宗を困難にしている原因を神学的志向性、出生率、宗教の社会適応の効率化という教会成長の社会学から考察したのち、創始者やカリスマ的指導者の存命中はめざましい成長をとげる土着運動も

(日本のキリスト教人口の一割強)、かれらの死後は衰退しているという現実から、土着化がかならずしも「万能薬」ではないことを論じ、仏教や神道などの神々の分業による「重層する義務」が習合した体系を構築する日本人の多元主義は、唯一の超越神による真理の独占を主張するキリスト教と衝突すること、またキリスト教への改宗層は旧佐幕派土族、地主や工場主など、共同体の制裁を受けにくい特権階級で、かれらは神道と仏教を下層階級の宗教とする儒学教育を受けた土族特有の偏見をもっており、日本人に広く受容されるにはキリスト教は「逸脱しすぎていた」と指摘して、韓国で植民地化による民族存亡の危機にキリスト教が日本政府への「対抗イデオロギー」として機能したのとは対照的な、キリスト教移植時の両国の政治的な国際関係に留意する。後半では、韓国において「徹夜祈祷会」「悪魔祓い」「山中の祈祷院」「癒しの儀礼」が定着して人口の四分の一を占めるキリスト教とシャーマニズムとの習合、韓国ペンテコステ派独立教会の急成長とその日本宣教、その成長理由として、信者の積極的参加と信徒に霊の力をあたえる「呪術の民主化」を挙げ、日本のキリスト教を相対化して、その停滞原因を示唆する。

第九章では、近代化と宗教の衰退を直結させる西洋社会学の近代化論と世俗化論は、日本の近代化にあてはま

らないだけでなく、一九七〇年代以降は世界の「再宗教化」が顕著であり、一九八〇年代後半には世界のキリスト教人口の過半数が、サハラ砂漠以南のアフリカ、ラテンアメリカ、アジアに南下して、「脱西洋化」の独立・土着運動に拍車をかけているように、もはや「第三世界の神学」が「代表的なキリスト教神学」となる可能性を提示。キリスト教のエキュメニズムが排除している門戸を開けば、新約時代の霊の力による「徴と奇跡」の復興を核として非西洋世界で発展を続ける独立した土着運動には、学ぶことがあることに、西洋教会は気づくであろうと著者は批評する。

本書では、どのような「世界宗教」でも文化を超えた「純粹な」表現などはなく、存在するのは、「特殊な文化的発露のみ」であるという著者の確信が、研究視座として貫かれている。この視角は慎重な記述分析によって均衡のとれた解釈をもたらし、「標準的な伝道史からはみ出した」ミクロな運動の解析をグローバルな布教潮流および日本宗教史というマクロな視点に位置づけることで、説得的な論証を提示することに成功している。

なお、本書は神々の分業で「重層する義務」が習合する体系を日本人の多元主義とするが、ユダヤ教的な至高神に通ずるような日本の神観念として「氏神の絶対性」の可能性を指摘する異論もあり（大濱徹也『講談日本通

史』同成社、二〇〇五年、一二九頁)、諸宗教者の会合で耳にする、死者供養に浸潤(土着化)しているという仏教者が発する言葉に、キリスト教は土着化しないではないという、現場からの(願いをこめた)逆説的な提言も存在することを付記しておく。

蛇足ながら、ミッシヨン諸教会も「祖先儀礼」を適応して土着化への変容があることを指摘するのであれば、『祖先と死者についてのカトリック信者の手引き』(諸宗教委員会編著、カトリック中央協議会発行、日本カトリック司教協議会認可、一九八五年)には触れたほうがよいであろう。また、表1「キリスト教宣教組織の日本伝道開始時期(一八五九—一九九二年)」(二〇頁)における一八五九年の最初の教派を「アメリカ長老教会」としているが、これは「アメリカ聖公会」の誤りである。訳語の問題をひとつ。「秘蹟」の原語はサクラメントであるが、これはカトリック用語であり、ほぼすべてプロテスタントの文脈で使用されている本書では、「聖礼典」または原語のカタカナ表記が適しているよう(正教会ではカトリックとおなじく七つのサクラメントを「機密」と訳出し、聖公会ではプロテスタントとおなじく二つのサクラメント(洗礼と聖餐)を「聖奠」と訳す)。

キリスト教の伝統的な主流派教会が怠る、日本人の伝統的な関心事である祖先や死霊にまつわる儀礼を、新約

聖書の伝統に根ざして、「自分たちの納得できる言葉」で再解釈し、「霊界への宣教」を担う(とくに第二波)土着運動のとりくみは、既存のミッシヨン教会伝統に安住する者には違和感をもたらすかもしれないが、養老孟司が本書後半の七・八・九章を評して世間の「逆照射」と表現したように(『毎日新聞』二〇〇五年五月二二日)、一般読者や研究者をふくめた新宗教運動に関与する者には、新鮮な驚きと共感をもたらすにちがいない。誕生にまつわる儀礼を神道が、死をめぐる儀礼を仏教が独占する日本では、キリスト教への応答の範囲や流用のパターンは広く大きく複雑で、特定の階級や利益集団がキリスト教の断片的要素を自家薬籠中のものにするという著者の認識は、キリスト教は日本では宗教としてよりも換骨奪胎されて近代化途上の国家・社会制度に摂取され、大衆には倫理や文化として浸透したと理解している評者にも共有されるものであるが、著者がさらに踏み込んで、異端視と偏見によってながく放置されてきた日本のキリスト教土着運動を、外来の宗教ではなく「日本製キリスト教」として正当に評価して研究の俎上にのせ、日本の世相を反映する鏡として解析した功績はおおきく、本書は先駆的好著として宗教史の領域をこえた幅広い分野での必読文献となるであろう。